

サエズリ図書館のワルツさん

1

紅玉
いづき

Kougyoku
Iduki





紅玉
Kougyoku
Iduki
いづき



悪魔の笑い声のように、世にも不快な音を聞いた。

「あっ……！」

慌ててブレーキを踏み込み、ハンドルに突っ伏す。肩で切りそろえた髪が揺れて、ハンドルに触れた。振り返りたくなかった。

なんてついてない日、と、青い小型自家用車の運転席で硬直した上緒さんは心の中で毒づいた。そう、今日は朝からついてなかった。朝のニュースの星占いは最下位だった。チャンネルを変えたら血液型占いも最下位だった。おうし座のA型は早朝から最悪を運命づけられた。ばっかじゃないの、と腹を立てながら化粧をして家を出たら、せっかくつくつた弁当を玄関先に忘れてきた。せっかくの、上緒さんのアスパラベーコンがばあだった。会社の食堂の自販機で買った乾いたパンを食べたらちよつと泣きたくなった。

上緒さんの課の总局さまの機嫌は最悪で、午後の業務開始十五分で盛大に八つ当たりをされた。上緒さんは悪くなかった、はずだ。女子トイレの個室でちよつと泣いた。

くたくたに疲れてやってられなくて、残業を半ばに放り出してどうしても、身体に悪いファストフードが食べなくなつた。アスパラベーコンのことは、考えなくなつた。なの

にフライドチキンの店は駐車場が満車だった。店内は空席だってあるっていうのに、なんてついてない！

そのまま帰るといろんなものに負けたことになるような気がして、上緒さんは隣の施設に無断駐車をすることにした。路駐の取り締まりなんてどうでもいいけれど、最近はガソリン泥棒だって横行しているのだと、カーラジオのFMは呼びかけてくる。

ガソリン泥棒だなんて。こんな田舎に無縁の心配だと思いつながらも、これ以上ついてないことが続いては敵わないと、振り切るように選局のボタンを一押し。リチャード・クレイダーマンのピアノに合わせて、天気予報に電気予報、空もエネルギーもぼちぼちだと声の綺麗なアナウンサーが伝えてくれる。そうだ、ぼちぼちだ。そのはずだと思いつながら、ハンドルを切る。

停めようとしたのがなんの施設かすぐにはわからなかったけれど、公共施設なら駐車場は無料だろうし、帽子を目深にかぶった警備員もいる。ずいぶん高齢の警備員のようだけど、いないよりは、マシだろう。無断駐車が露見して怒られることもないだろうと思った。たかだかファストフードを食べる間だ。

おあつらえ向きにひとつ駐車スペースがあいていた。隣の車も自分の車も小型自家用車で全然余裕、だと思ったのに。

わずかにハンドルの切り方が悪かった。心臓に悪い音を立てて、上緒さんの車と、もと

から停まっていた車が触れあった。そう言えば微笑ましいけれど、至極一方的で逃げようもない、接触事故、だった。

街灯はついていたらけれど、辺りはもう薄暗かった。上緒さんは顔を上げて、半泣きになりながらぐっとハンドルを握り、心を決めてアクセルを踏み込もうと、した。

今度は不吉な音と、足下に不自然な衝撃がきた。嘘だ、と思いながら頭を下げたら、無惨にもパンプスのヒールが折れていた。ヒールのある靴での運転は決していいことだとは思っていないけれど、働き始めて二年間、こんなことは一度もなかった。

「うー……」

当て逃げをしようとしていたのを神様に見抜かれた気持ちになって、そのまま車の中でハンドルに突っ伏した。心の中で神様からいくつ恨みをかっているのか数えてみた。煩惱の数
は確か、百八つ。そうではなくて。

（とりあえず、当て逃げは、だめだわ……）

力尽きたようにそう思って、他の車の邪魔にならないよう、かすかに車体をずらし、おぼつかない足取りで車を降りる。さっき目に留めた警備員を視線だけで探したが、もう仕事上がりの時間だったのだろうか、見つけれなかった。

夕焼けが照らす建物は大きく、丸いフォルムのガラス張り。中にはたくさんさんの棚が見える。二重扉になっている、不思議なほど新しそうなその施設の入り口に立ってはじめて、

上緒さんはその名前を知った。

サエズリ図書館、という呑気なプレートをしばらく見つめて、逃げるように中に入った。

はじめて足を踏み入れた図書館は、清潔で、かいだことのないにおいがした。それが紙と糊のにおいだということは、上緒さんにはわからなかった。どこか胸がつまるような、空腹を刺激するようなつかしさだった。けれど満足に吸い込むこともなく、上緒さんは早足でカウンターに向かい、「すみません」と呼びかけた。カウンターにいた女性は「はい」と低い声で答えた。受付カウンターに座ってはいたけれど、受付嬢、と呼べるほど若い職員ではなかった。真っ白の髪をおかっぱにして、銀のフレームの眼鏡をかけた目元には、はつきりとした皺が刻まれている。ハイネックのトップスと、制服なのだろう、かっちりとしたベストに身を包んでいた。

「すみません、あの」

緊張を振り切るように、噛みながら言う。

「今、駐車場で、停めてあった車に、ちよつと、ぶつかって……」

その言葉に、カウンターの図書館職員は控えめに眉をあげて、驚きを示した。非難の言葉を受けるだろうかとおびえていたが、相手はそれ以上顔色を変えることはなかった。「それ

では、そうですね、事務室の方に行きましょう」とやはり静かに低い声で言うと、立ち上がって上緒さんの前を歩き出す。タイトなスカートに、黒のタイツを穿^はいていた。上緒さんは片方の足をつま先立ちにして、周りを見ないようにその後ろについていく。平日の夕食時だというのに館内にはちらほらと気配があった。

人がいる、ということが意外に思えた。同時に上緒さんは、自分が生まれてはじめて図書館という施設の内部を歩いているのだという事実をかみしめた。

上緒さんは決して本が好きな人間ではなかった。親しむような生活も、生まれてこの方したことはなかった。図書館という施設について、概念としてはもちろん知っていたが、自分には死ぬまで無縁のものと思っていた。学生の頃に教師に連れられ、かび臭い図書室に何度か入ったぐらいで、本というものにろくに触^{さわ}ったこともなかった。古くさくて、敷居が高く、好事家^{こうずか}が好むもの。それが本に対する、上緒さんの印象だった。自分の場違いさが嫌になって、上緒さんは背中を丸めて、ひたすらつま先を見て歩いた。

事務室、と女性が言った場所は、図書館の奥にある大きくも小さくもない部屋だった。十にも満たない、それぞれ端末の置かれた事務机と、応接用だろうかソファがある。そのソファに座るように促^{うなが}されて、上緒さんはまるで学生時代に戻って、職員室に怒られにきたようだ、と思った。

立ったままではなく、座って怒られるんだから、覚悟をきめなければならぬ。憂鬱^{ゆううつ}に

胸が重くなった。

働きはじめてから車には乗っているけれど、相手がある事故を起こしたのはこれがはじめてだった。警察を呼ばなくちゃいけないんだろうか、実家に電話をした方がいいんだろうか。ああ、きつと実家の母親はまた自分の注意力のなさを罵るに違いない。あなただけの子はどうしていつもそうなの。もう子っていう年でもないんだけどな。

もしも相手がやくざのような人だったらどうしよう。次から次に浮かぶ不吉な想像に頭の中がぐるぐるした。金曜日の夕方に、一体なにをしてるんだろうと、自分の惨めを呪う気持ちにもなった。

案内してくれた図書館員は事務室のまた奥の階段から下をのぞいて、

「ワールツさーん」

と呼ぶ。

（ワールツさん？）

不思議な響きの呼び名に、上緒さんの頭の中のぐるぐるが止まると、下から「はーあー」という返事と階段を上る音がした。図書館員の女性はそれで自分の役目を終えたとばかりに、会釈をしてホールへ戻っていく。すぐに階段から現れたのは、今し方の図書館員よりもずいぶん若い女性だった。自分よりも少し上か、下手をすれば同じくらいなのではないかと上緒さんはぼんやり思う。やはりかつちりとした制服を着て、長い髪を首の後ろ

でまとめている。眼鏡はしていない。やわらかで若々しい、けれど落ち着きのある笑顔で言った。

「こんにちは」

「あ、はい。こんにちは」

思わず上緒さんはそうこたえていた。立ちあがるべきだったのかもしれない。けれど、折れたヒールが気になって、タイミングを逸^いしてしまった。

女性は頭を下げて、ポケットから薄い名刺ケースを取り出すと、最近では滅多^{めった}に見ないような、シンプルな紙名刺をテーブルの上に置いた。

割津^{ワルツ}唯^{ユイ}。他の肩書きより数ポイント大きな書体の名前が、まず目に入った。指で触ると、文字にはわずかな凹凸があった。

「わたしは、ワルツと言います。サエズリ図書館の代表で、特別探索司書です」

「はあ……」

本という高尚な文化にはうとい上緒さんだったから、ワルツさんの肩書きがよくわからなかった。ただ、彼女の胸元にある名札を見て、美しい書体で『ワルツ』とだけ書かれているのを見るに、確かにワルツさんだ、と上緒さんは思った。

ワルツさんは向かいに座り、上緒さんに笑いかける。

「どうされましたか？」

優しい笑顔に、なんとなく責められるような気持ちになった。プレゼントでもあげたら、素敵すてきな笑顔をくれそうな人だった。でも、上緒さんはプレゼントなんて持っていない。

「あの、事故を」

いつまでも躊躇ためらっていても仕方がない。勇気を出して、上緒さんは言った。

「駐車場で、車を、ぶつけてしまつて……」

「まあ」

と、ワルツさんは形のよい眉を上げた。それから、「お怪我けがはありませんか？」と上緒さんに尋ねてくれた。

優しい口調だったから、泣きそうになつてしまった。

「怪我は大丈夫だったんですが……。隣の車に、ちよつと、こすつてしまつて……」

「あら……」

それじゃあ、警察を呼びましょう、と言われるのを覚悟して上緒さんが俯うつむいていると、ワルツさんは頷うなずいたようだった。揺れる空気で、上緒さんにはそれがわかった。そして、言う。

「それじゃあ、見に行きましようか。駐車場」

そうして彼女は立ちあがった。上緒さんも顔を上げる。ワルツさんは、上緒さんの見る限り、面倒なそぶりなんてかけらも見せなかった。

立ちあがるとすぐに、ワルツさんは上緒さんのヒールに気づいて、下駄箱げただこからサンダルを持ってきてくれた。古びた健康サンダルだったけれど、上緒さんにはありがたく借りた。

足元がしっかりすると、少しだけ気持ちい上向きになって、自然と視線も上がった。

外はもう日がかげっていたけれど、明るい館内だった。二階、いや三階まで吹き抜けの高い天井に、送風機が回っている。館内は目に優しい少しくすんだ白を基調として、壁面はほとんどが、ガラスか書棚だった。何カ所か、二階へ上がる階段があり、エレベーターは透明な油圧式。カウンターの向かいにひとつだけ、地下へと降りる階段も目に入った。

並んだ棚の天板は合成プラスチックで、汚れがつかないように塗装されている。並ぶ本はぴったりと整列していた。

当たり前のことなのだろうけれど、書棚インターフェイスで見ると膨大な量の書物が、棚にびっしりと鎮座していた。それぞれの本には下部に記号と番号が書かれたラベルが貼られて、タグだけでない分類が成されていることがわかる。その背表紙に手を伸ばしたら、一体どんな固さなのだろうかと上緒さんは想像する。ぴったりと整列した様子が、なんだかおそれおおく、読みもしない本には、触ろうという気持ちにはなれなかったけれど。

外に出ると、辺りは一層明るさが落ちていた。夕焼けの中でワルツさんと上緒さんは、事故現場に立つ。

当たり前のことだけれど、上緒さんの車はいい子で持ち主を待っていたし、青い塗装が少し傷ついているのも、そのままだった。

ワルツさんが二つの車の間を覗き込む。

「ここですか？ ああ、傷が」

「そうなんです」と上緒さんは身体を小さくした。

ワルツさんは頷く。

「見覚えのある車だから、きつとよくいらっしゃるお客さんのものだわ。もう少し時間がはやかったら、警備員さんの勤務時間内だったんだけど……今日は早上がりだから……」

「どなたのものか、わかりますか？」

上緒さんが尋ねると、ワルツさんは頷いた。

「わかりませんが、ちよつと探してみましよう」

「どうやって？」

ここで待っていればいつかは持ち主が帰ってくるだろうし、それまでこのまま？ それとも、迷子放送よろしく、あの静かな図書館に呼び出しをかけたりするのだろうか。それはなんだかとても気が引けるなと思っていたら。

「あ、本」

助手席に目を止めて、ワルツさんの顔がほころんだ。上緒さんも覗き込めば、確かに助

手席に、一冊の本が置かれていた。赤い色のハードカバー。こちらから見える背表紙には分類を書いたラベルが貼られていなかったから、個人所蔵のものだと上緒さんにもわかる。助手席に本。なるほど、図書館によく通うような人は、自分などとは違う人種だと上緒さんは思った。けれどワルツさんは、もっと違うことを思ったようだった。

「歴史小説……。だとしたら、多分……」

ぶつぶつと呟つぶやきながら、ワルツさんは歩き出す。その背中を、上緒さんが追う。ワルツさんはヒールのあるパンプスで、自動ドアをくぐりサエズリ図書館の中に戻ると、迷いなく貸し出しカウンターに近づき、身を乗り出した。

「ねえサトミさん、岩波イワナミさんって来てました？」

座っていたのは、先に上緒さんを事務室に案内してくれた受付の職員だった。その胸元をちらりと見れば、ワルツさんと同じ書体で、『サトミ』の文字。サトミさんはワルツさんの唐突な質問にも淡々と答えた。

「ええ、来てました」

「ビンゴ」とワルツさんは嬉しそうに言って、重ねて聞いた。

「本って、借りました？」

「ええ、さきほど」

「よかった。最新の貸し出し状況を表示して下さい」

ワルツさんがほっとした顔をする。そして言い終わる前に、サトミさんの節くれが目立つ、爪の磨かれた指が動き、なにかの情報を画面に表示した。ワルツさんは乗り出した身体の角度をかえて、一瞬それを覗く。プライベートの問題もあるのだろう。ディスプレイの正面からしか文字は判別出来ないようになっていたから、上緒さんには、どんな本のタイトルが表示されているのか見ることは出来なかった。

「問題ありません」

ワルツさんは頷くと、今度は静まりかえった館内へと歩き出す。上緒さんは慌ててそれを追った。一体なにをどうするつもりなのか。注意深く、その姿勢のよい背中を見つめていたが、ワルツさんはなにを、どうも、しなかった。

ガラスの壁に面した階段をのぼり、ソファのある明るい窓辺へ。そこに、ねずみ色のツナギを着たおじいさんが、傍らに本を積んで座っていた。その膝には当然のように、分厚い書籍が開かれている。

「岩波さんー」

とワルツさんがおさえた声で呼びかけるので、上緒さんは少し驚いた。呼ばれた岩波さんの方はひょいっと本から顔をあげて。

「ほうい」

と一声答えてみせた。足早に近づいて、ワルツさんは言う。

「探しました」

「探されました、か」

「はい」

嘘だ、と上緒さんは背後で思う。ワルツさんは、絶対、岩波さんを探してなんていなかった。常連さんだから、どこにいるかわかるのだろうか。どっちにしろ絶対、探してなんかない、と上緒さんは思うけれど、言わなかった。

「どうしたね」

と岩波さんがワルツさんに尋ねる。ワルツさんは横に一步ずれると、綺麗な手首をひらりと上にして、上緒さんを示しながら岩波さんに言った。

「こちらのお客さまの車が、駐車場で岩波さんの車と接触してしまったそうで」

「ほ」

と岩波さんの口が丸く開いた。上緒さんは慌てて、勢いよく頭を下げる。

「すみません!!」

そのまま頭を上げられないでいると、上緒さんの頭のとっぺんに、岩波さんの声がかかる。

「怪我は？」

驚いて、上緒さんが顔をあげる。中途半端に腰を折ったまま、ぶんぶんと左右に首を振

ると、

「怪我がないならよかった」

と岩波さんは笑った。

情けないことだと思うけれど。

ぶわっと上緒さんの目に涙が浮かんで、しばらく顔が、上げられなかった。

外はもうすでに薄暗くなっていた。冷たさを含む風と、虫の鳴く声が、そこかしこから聞こえてくる。

岩波さんは塗装の傷ついた自分の車をしげしげと見て、「自分でやってみようか」と呟いた。いくら弁償することになるのかと、恐々としていた上緒さんは面食らう。

「自分で、って」

「明日もいい天気だと言うからなあ」

岩波さんはそんな理由を述べた。そしてワルツさんに向き直る。

「ワルツさん、車の補修の、本はあるかね」

「ありますとも」

自信に満ちた笑顔で、ワルツさんが頷く。

「どの辺りかな」

「一階右の庭側、F棚の右からこのくらいの、この辺り」

ワルツさんはよどみない口調で、左右に動かした手を、自分の顎^{あご}辺りで止めた。

『『自家用車の補修整備』が一番新しい書籍です。戦後^{A.P.}発行ですから、わかりやすいかと思えますよ。製本もリングノートの形式で、ふんだんに写真がのった初心者向けです」

よどみないこたえに上緒さんが啞然^{あぜん}としていると、岩波さんは笑って、自分の手を、ワルツさんと同じ高さまで上げて言った。

「この辺り、だな。見てみよう」

「是非」

にっこりとワルツさんは笑った。啞然^{あぜん}としている上緒さんを、岩波さんが振り返って言う。

「お嬢さん、よかったら、明日朝、また図書館にいらっしゃら」

「えっ」

「あんたの車の傷も、わしが直してみよう」

うまく出来るかはわからんがなあ。呵々^{かか}と笑いながら岩波さんが図書館に戻っていく。上緒さんのこたえも聞かずに。

確かに、そうしてもらえれば嬉しい、と上緒さんは思う。車の補修なんて、どこに行け

ばいいかわからない。D・Bを調べてやり方がわかったとしても、自分で出来る自信なんてない。だから、渡りに船の申し出、ではあるのだけれど。

想定外のことばかりで、上緒さんは呆然とするしかない。「明日来ていただけるのでしたら」と隣でワルツさんが微笑みながら言った。

「履き物も、どうぞそのままお帰り下さい。明日でよろしいですよ」

「あの」

先にお礼を言わなければならなかっただろうに、上緒さんの口について出たのは、不躰な問いかけだった。

「本……全部、覚えてるんですか？」

荒唐無稽なその言葉に、ワルツさんは笑う。

「まさか、全部は覚えていませんよ」

じゃあ、なにを。どこまで……という上緒さんの問いは、ワルツさんの微笑みにかき消された。

「せっかくですから。本、借りていかれたらいかがですか？」

「え、でも」

そんな簡単に借りられるものとは思わなかったし、お金をとられても困るし、そもそも、私、本を。

読んだことなんて、という言葉を告げることは出来なかった。だって、ここはどこだ？

図書館の、駐車場じゃないか。

「……はじめてなんです」

そんな間の抜けたことを言ったら、ワルツさんは笑った。

「ようこそ。サエズリ図書館へ」

駐車場の外灯に照らされた、どこまでも、どこまでも優しく美しい笑顔だった。

貸し出しカウンターの隣、白い椅子に座ると、デスクはそのままディスプレイになっていた。『新規登録者用』との画面が表示されている。

「まず、この図書館は公共施設ではありません」

デスクを挟んで向かい合った、ワルツさんのその言葉に、上緒さんは驚いた。

「サエズリ図書館の蔵書は過去の個人所有物の寄贈と、様々な協力会社の寄付からなりたっています。利用者の制限は特にありません。身分証をお持ちになって、利用者登録を済ませた方は、規約に同意したとみなし、どなたでもご利用いただけます」

私立だったのか。しかもすべて無料だなんて。お金の心配を少なからずしていた上緒さんはとても意外な思いで、促されるまま運転免許証を出してリーダーに通した。先進時代

のリーダーだった。確かにこれは、公共施設では用意出来ないものなのかもしれない。技術自体は珍しいものではないが、どこも財政難にあえぐ今の自治体で、これだけの設備を軽々しく投入することは難しいだろう、と一応企業向けの電子機器の会社で事務をしている上緒さんは思う。その間にも、ストレスを感じさせない速やかさで、住所や生年月日、個人端末情報が転載される。

「ありがとうございます。こちら、通常業務の範囲でのみ使用させていただき、外部へもらすことはありません」

よく聞く定型文を述べたあと、「サエズリ図書館の利用規約を説明いたします」とワルツさんの流れるような説明が続いた。

「図書の貸し出し期間は二週間。ひとり五冊までとなります。延長はネットワーク上から行えますが、四週間以上の延長は、一度図書館に出向いていただいて借り直しという形をとらせていただきます。同一図書の貸し出し回数に制限はありませんが、予約者がある図書は、その限りではございません。予約者の有無はネットワーク上から確認していただけます。予約は一度に三冊まで。新刊のリクエストに関しましては、お断りすることもあります。予約は一度に三冊まで。カウンターまで申し出ていただくか、ネットワークでも受け付けております。また、休館日は毎週月曜日ですが、不測の停電等が長く続く場合、システム障害などがおこった場合は臨時休館をいただくこともあります。その場合は貸出期間が

延長されます。カードに表示されますよ」

差し込まれたカードは、薄い水色をしていた。名前と番号、それから液晶表示パネルが埋め込まれたシンプルなものだ。

「こちらが館内の地図となります。一階、二階は開架となっており、閲覧は自由です。比較的新しい図書があります。地下は書庫となっており、戦前の古いものが主です。書庫には利用者登録を済ませ、カードをお持ちでしたら入室が出来ます。地下の一部は閉架となっており、職員でないと入室出来ない場所がありますので、ご了承ください。検索結果に閉架と書いてある場合は、一声おかけ下さいね。また、各棚に検索端末を備え付けてあります。使用は自由です。もちろん、わからない場合はいつでもお尋ね下さい」

地図を見るも、なかなか実感がわかなかった。一階、二階、地下もあるとすれば、上緒さんは間違いなく、これまで生きてきた中で一番本がある空間に立っていることになる。

「それでは最後に規約の中でも一番重要な部分にチェックをいただきます」

上緒さんの名前が入った利用者登録画面が切り替わり、ワルツさんはゆっくりと、いっそう丁寧な調子で口を開いた。

「当図書館には、特別探索司書が配備されています。当館の資料については、全て特別探索司書の管轄となることをご了承ください」

口調は丁寧だったが、上緒さんは首を傾げた。

「あとう、特別探索司書……って？」

その問いを予想していたのだろう。ワルツさんがまつげをおろし、形のよい唇くちびるでなめらかに説明をした。

「現在ではあまり耳にしなくなりましたから、ご存ぞんじないかもしれませんね。かつて国会図書館をはじめ、資料の保存を目的とした、特別な図書館の蔵書にマイクロチップが埋め込まれました。その各図書情報の管理、特に位置情報へのアクセス権を認められた者を、特別探索司書と呼びます」

「ええと、つまり」

「つまり、当館で必要と判断した場合、貸し出しされたもの、されていないもの問わず、資料の位置情報を調べる場合がある、ということです。当図書館では紛失や破損による弁償を受け付けておりません。基本的に利用者の方に金銭を請求することはありませんが、その代わり、なにがあっても、貸した図書は返していただいています」

なにがあっても。その言葉が重く、強烈に思えて、上緒さんは小さく息をのんだ。確かに全図書のチップが位置情報把握のために動作するのであれば、どこに本があってもわかるだろう。同時に、先に感じた不可思議さにも説明がつく気がした。

本を借りた、岩波さんが、どこにいたのか。

貸し出し図書の位置情報を画面に表示すれば、岩波さんの居場所も、魔法のようにわか

るということだ。

(つまり……)

目の前に佇むたたずワルツさんを見上げて、上緒さんは呟いた。

「――あなたが？」

「はい」

答えるワルツさんが、整った形の唇を持ち上げる。爪の美しい指先を、自分の胸元に。

「わたしがサエズリ図書館代表であり、特別探索司書です」

どこか誇らしげに、そう名乗った。

すべての登録が終わると、耳にやわらかなクラシック音楽が届いた。続くアナウンスは、閉館の三十分前を告げるもの。ワルツさんの声の録音だ、と上緒さんは思う。定時のアナウンスに、合成音ではなく録音を使うとは昨今珍しいと感心した。

「今日は、本、借りていけますか？」

ワルツさんに尋ねられて、上緒さんは利用者カードを握りながらうろたえる。

「あの、なにか、オススメありますか？」

尋ねてから、自分はなにを言っているのだろう、と恥ずかしくなった。オススメの本は、

なんて。小学生が国語の先生に聞くんじゃないし。

けれどワルツさんはうろたえるような事はなかった。

「これまで、読書の習慣は？」

「ええっと……あ、あんまり……」

恥ずかしそうに首を縮めながら呟く上緒さんに、ワルツさんは目を細める。

「そういう方、多いんですよ。今は活字といえばネットワークですものね」

非難でも落胆でもなく、自然なフォローのような、優しい口調だった。「わたしの好みでかまいませんか？」とワルツさんが尋ねる。

「は、はい！ ……出来ればあまり……難しくないものを……」

「もちろんです」

言いながら、ワルツさんはすでに歩き出していた。その横顔がひどく楽しそうなので、上緒さんは不思議な気持ちになる。

なにがそんなに嬉しいのだろうか。利用者が増えれば、図書館の実績になるからだろうか。

「大人になってから触れる絵本も格別ですが」

人がめつきり少なくなったサエズリ図書館を歩きながら、ワルツさんが口を開く。

「あまり短い物語だと、本を読んだ、という気持ちにはなりません」

静かな図書館に、ワルツさんの声だけが響く。

「ノンフィクションやエッセイは相性や、普段の生活からの好みもありますし、普遍性^{ふへんせい}には欠けますね」

お仕事の帰りでしょう？ とワルツさんが上緒さんに尋ねる。いきなり問いかけられて、上緒さんは背筋を伸ばして「はい」と返事をする。

「お疲れ様です。それでは、図書らしく、読書らしく、重みがあり、厚みがあり、それでいて遠くまで飛べる」

ワルツさんは低めの棚から、ハードカバーの一冊を取り出して、言った。

「長く読みつがれた、海外児童文学の愛蔵版です。読みやすいですよ」

山吹^{やまぶき}に近い色をした、カバーのない、固い表紙。指先に力をいれながら、その弾力を、上緒さんは不思議そうに確かめた。

生まれてはじめて手にする、図書館の本だった。

少々傷物になってしまった車を走らせ単身の集合住宅に帰り着くと、上緒さんはスーツをぬいで無造作にソファの上に投げた。シャワーを浴びに風呂場に向かいながら、玄関先に置いた、ナイロン袋入りの自分のパンプスを見て。

（仕事用の靴、買いにいかなきゃな）

忘れないように、ナイロン袋はそのままにしておくことにした。

靴箱の中、地味なパンプスはあれ一足だけだった。サンダルなんかで行ったら、お局さまになにを言われるかわからない。

シャワーを浴びて髪を乾かしながら、置いてきぼりの弁当箱をあけて、アスパラペーコンをつまんだ。秋口でまだ蒸し暑いのが、傷んではいなかった。そこでようやく、上緒さんは今日一日が、それほど悪いものじゃなかったかもしれないと思った。

うん。しんどいことが多い一日だったけれど、少なくとも、最悪なんかじゃなかった。

上緒さんは手を洗うと、仕事用の靴を開いて、持ち帰った本を取り出した。

ソファに座って、固い表紙をめくると、あのサエズリ図書館のにおいがした。なめらかな紙をなでて、インクの染みを確かめる。文字は焦げ茶だった。しおりの代わりになる、黄色い紐をなぞったり、総ページを確認したり。しばらくそんな風にして、ようやく上緒さんは文字を追い始めた。

「……」

読みながら、うつぶせになり、仰向けになり。

「……………」

指先で文字をたどり、行っては戻り、を繰り返す。物語の中、時代と世界の説明は、上

緒さんの現実と乖離^{かいり}しすぎていて、最初が肝心だと思うのに、どれも頭に入らず苦勞した。食べ慣れていないものを無理矢理口に入れる感觸で、咀嚼^{そしゃく}の仕方が見つからない。本文をつまんで、残りのページの分厚さを確かめながら、片眼をつむって言った。

「ながい……」

昔はそりゃあ、読書感想文を書いたこともあるから、このくらいの文章は読んでいたのだろう。しかし、高校を出て働き始めてからは、物語を追うなんて機会はめっきりなくなってしまった。

事務職を始めてからは毎日文字に触れるも、せいぜいが一度に一画面程度。

終わるのだろうか、二週間で？　そのためには毎日何ページ読まないといけないのだろう。ああ、頭が働かない……。

いつの間にか、ソファに横になったまま、上緒さんの意識はとろとろと溶けていった。

翌朝ソファの上で目を覚ました上緒さんは、掛布団^{かけぶだん}といえど胸元に広がった本が一冊あるだけ。身体のきしみを感じながらも着替えをすませ、普段よりも二段階ほど簡単に化粧をして、チヨコレートを数個食べると家を出た。休日の午前中から外に出るだなんて、滅多にないことだった。

サエズリ図書館に車を入ると、昨日も見かけた警備員さんが、肩を揺らしながらやってきた。

「ああ、あんた」

入れ歯だろうか。不明瞭な発音で、窓を開けた上緒さんに言う。

「あんたはあっち。岩波さんが、来たら回してくれと、いうとった」

軽く礼を言つて、指示された、車の少ない駐車場に停める。隣には岩波さんの車があり、すでに岩波さんは塗装に磨きをかけていた。昨日と同じ、ねずみ色のつなぎ。首に黒く汚れた手ぬぐいをかけて、厳つい顔を拭いている。

岩波さんの車のボンネットには、昨日借りたのだろう。車の整備の本が一冊、開いたまま置かれていた。

「おはよう」

「おはようございます」

挨拶を交わして、上緒さんは車をのぞきこむ。助手席にまた、本が積まれているのが見えた。今度は図書館のラベルがついている。昨日館内で読んでいたものと同じ本だ、と思つて、上緒さんは思わず声をあげていた。

「もう読まれたんですか!？」

「ん？」

岩波さんが顔をあげる。日に焼けた浅黒い肌に、髪と眉だけが白かった。

「ああ、半分はな」

「半分って……」

一冊一冊は、上緒さんが借りた本よりも薄く感じられたが、それでも一日で読むなんて、しかも複数、昨日の夜に借りて！　上緒さんは、わけがわからない、と思った。さすがで、よくわからない。

「本って」

不躰だとは思ったが、上緒さんは聞いていた。

「本ってどうやったら、こんなにたくさん読めるんですか？」

岩波さんは丁寧に作業をしながら、顔をあげずに答える。

「好きになれば、読めるだろう」

「どうやって好きになりますか？」

「そりゃあんだ。面白ければ、好きになるだろう」

岩波さんは整備の本のページをめくろうとして、手を止め、首の手ぬぐいで指先を拭いた。その仕草に上緒さんが慌てて、一枚ページをめくってあげる。

実家の祖父母をはやくに亡くしている上緒さんは、老人に慣れていない。皺の浮いた手が珍しかった。老いたそれは細い指かと思ったのに、短くがっしりと太くて、爪は濁って

いたけれど、震えもせずに器用きように動くようだった。

「本は読まないかい？」

上緒さんがページをめくる様子を見て、岩波さんが尋ねた。

「雑誌、とかなら……でも、それも携帯とか、ディスプレイが多くて……」

上緒さんにとっては、雑誌を読むことは買い物をするのに近い感覚だった。通販を多用しているからだろう。気に入ったものはすぐに注文してしまうことにしている。時々流通とどこおが滞って届かないこともあるけれど、上緒さんの住む町では買えないものも多いのだ。

「同じことだし、違うことだ」

しゃがみなおしながら、岩波さんは言う。

「本にしかないもんもある。それがいいと思えば、本がよかろう」

本を読む人間が立派なわけではない、と岩波さんは、ひとりごつように言った。作業の手を止めることなく。

「わしは毎日本を読むがね、娘はわしの本好きを、贅沢ぜいたく趣味だと渋い顔をしたし、端末映像やデータの方が万倍面白いと、何度も言ったよ。それは正しいんだろうと、わしも思う」
続いて落ちた呟ぐきは、悔いくのようであつたし、諦めあきらめのようなでもあつた。

「行き過ぎた執心やまいは病だ」

上緒さんは答えることが出来なかった。確かにそうかもしれないと、思いもしたのだ。

言葉を返せず佇む上緒さんに、もうしばらくかかるから図書館の中で待つがよいよ、と岩波さんは言ってくれた。

時間を潰すには、これ以上ない場所だから。

図書館のカウンターには、昨日と同じ白髪のサトミさんが座っていた。上緒さんがカウンターに近づくと「おはようございます」と事務的な挨拶で迎えてくれた。低い声はにこやかでもなんでもないので、威圧感を覚えてしまうのは仕方がないことだ。

「おはようございます。あの、ワルツさんは事務室ですか？」

借りた本は持ってこなかったけれど、昨日借りたサンダルを返さねばならない。カウンターに差しだすわけにもいかないから、事務室に向かおうと尋ねたら、サトミさんはちらりと自分の腕を見た。ベルトの細い、可愛い腕時計だった。綺麗に磨かれた爪といい、そういうのが好きなんだな、と上緒さんは思った。そう思ったら、なんだか親近感がわいた。腕時計を確認したのは一瞬。サトミさんは顔をあげる。

「この時間はまだ、配架と書棚整理にあたっているはずです。公開ホールのどこかにはいるはずですが、呼び出しをかけますか？」

「いえ！」

自分で探してみます、と言おうとして、ふと思いついて、上緒さんは聞いた。

「岩波さんを探した時のように、位置情報を見るんですか？」

その言葉に、サトミさんが視線をずらす。

「いえ。この図書館の特別探索司書はワルツさんだけですから、私に書誌座標のアクセス権はありませんし、閲覧も出来ません」

それは、つまり。上緒さんが続けようとしたが、背後で自動ドアが開く音がして、他の客が現れたのだとわかる。

「こちらの端末には呼び出し機能がありますから、見つからなかったら、またどうぞ」

「はい！」

上緒さんはそそくさと館内に足を踏み入れた。開館したばかりの図書館は人も少なく、すぐに会えるだろうと思っていたが、背の高い書棚が視界をふさいで、まるで迷路のようだった。探し人は、なかなか見つからない。

「……あ」

ようやく見つけた姿勢のいい後ろ姿にほっとする。声をかけるわけにもいなくて、近づいていくけれど、ワルツさんは気づかない。どうやら立って、本を読んでいるようだった。背後に立っても振り返ってくれないので、上緒さんは躊躇いがちに、口を開く。

「あのーワルツ、さん？」

「はい!？」

肩を揺らして、パタン、と本を閉じる大きな音とともに、ワルツさんが勢いをつけて振り返った。胸には大事そうに、今読んでいた本を抱えている。

「ご、ごめんなさい」

あまりに驚いた様子に、逆に悪いことをした気持ちになって、上緒さんは思わず謝っていた。

「あ、えっと」

硬直していたワルツさんが、謝罪をうけて戸惑うように眼球をふるふると揺らし、それからぺこんと頭を下げる。

「こちらこそ、ごめんなさい……」

恥ずかしそうに、ワルツさんは頬を染めた。その愛らしい様子に、上緒さんは笑う。

「読書中でしたか？」

ワルツさんは、よけいに身体を小さくしながら、本を抱き直す。

「勤務中、なのですけど」

そこで、長い指を口元に。小さな声で、上緒さんに懇願した。

「サトミさんには、内緒にしておいて下さい」

小さな子供が叱られることに怯えるようで、上緒さんは笑ってしまった。

「わかりました」

任せて下さい、と自分の胸を叩きながら、上緒さんは言う。

「やっぱり、本、好きなんですね」

なにを今更、というようなことだった。けれど、仕事はいつも、好きと直結するものではない。好きで仕方がない仕事につければそれにまさるものはないけれど、世の中はいつだって、思う通りには運ばない。はじめた仕事を好きになるか、好きでもない仕事を続けていくか。どちらかといえば後者な上緒さんは、ワルツさんを羨^{うらや}んだし、同時に素敵なとだと感激をした。

言われたワルツさんは、花がほころぶように笑って、言う。

「はい。この図書館の蔵書は、わたしの宝物です」

宝物とはまた、大仰な言葉だったけれど、上緒さんは否定することはせず、頷くだけでこたえた。

「これ」

ナイロン袋に入ったサンダルを差しだして、頭を下げる。

「ありがとうございます。助かりました」

どういたしまして、とワルツさんが受け取る。今日の上緒さんは学生時代によく履いたスニーカーを靴箱から引っ張り出してきていた。

「本は読まれましたか？」

次に問いかけられたのはそんなことだった。昨日の今日という性急さに上緒さんは驚くと同時に笑ってしまつて、指で薄い隙間をつくりながら、

「まだ、ちよつとだけ」

と答えた。ワルツさんも自分の気の早さに気づいたのか、「そうですよね」と眉を下げて笑うと首を傾げた。その仕草も愛らしかった。

そんなワルツさんにも聞いてみよう、と上緒さんは思う。岩波さんに聞いたらよくわからなかったので、また少し違う聞き方で。

「本を読む時の、コツとかつて、ありますか？」

「コツ、ですか？」

ワルツさんはぱちぱちとまばたきをした。天然物の色の薄いまつげが、ぱさぱさと揺れて、音がしたような気がした。

「んー……」

そのままワルツさんは天井を見上げて、それから、ぱつと気づいたように、視線を戻して言った。

「あ、トイレ」

「トイレ？」

上緒さんは面食らう。すると、ワルツさんは神妙しんみょうに頷いた。

「トイレには行っておくと思います。いいところで中断されると、悔しいですから」
そういうことを聞きたかったわけではない。けれど、上緒さんは思わず笑ってしまった。
全然参考にはならなかったけれど、その答えは素敵だなど、上緒さんは思ったのだ。端
末は片手で使えるし防水加工もしてあるから場所を問わない。けれど本は、紙とインクだ
から不自由もあるし、場所も問うんだと思った。

わかりました、と上緒さんが答えると、ワルツさんがなにかに気づいたのか、軽く肩を
揺らした。ポケットから取り出した端末に「あら。お客さんだわ」と呟くので、上緒さん
はワルツさんの業務の邪魔をしていることに思い至る。

「すみません、お引き留めして」

いいえ、とワルツさんは綺麗に笑った。胸に抱いたままだった本を棚へ、丁寧に戻すと、
「それでは、よい読書を」

そう言い残し、去っていく。

よい読書。上緒さんがその言葉に驚いたのはきつと、読書に良し悪しがあるなんて思っ
たことがなかったからだ。同時にもっと、神妙に読書と向き合わなければならぬのだな
と背筋を伸ばした。そう、とりあえずトイレにでも行って。

まだここで時間を潰すのだろうかから、とにかく本を読んでみよう、と上緒さんは思う。

靴を買いに行くのは、明日でもいい。

でも、なにを読めばいい？

まったく思いつかなかったので、上緒さんは一歩前に出て、ワルツさんが抱いていた本をのぞいてみた。白い表紙に金の文字の、確か……。

これだ、と手にとって、引き出してみようと力をかけて、手を止めた。

『脳外科の権威と肖像』……う？」

っていうと、なんだろう？

なんだかよくわからなかったけれど、とりあえず、引き出した図書は上緒さんの手に重く、その内容もきつととびきり重いに違いない、ということだけはよくわかった。わかったのはそれだけだったけれど。

よい読書への道は、上緒さんには厳しそうだった。

天気の良い休日でもあったから、徐々じょじょに図書館の中は人が増えていった。目にとまるほとんどが上緒さんよりずっと年配の利用客で、時折小さな子供が視界に現れると、思わず視線で追ってしまふ。今駆けていった子供達は兄妹だろうか？ 追いかけるのも不審なので、上緒さんの中で疑問は疑問のままだった。

利用客は図書館によく慣れているようで、めいめいに図書を借りたり探したり、読んだりしている。上緒さんはいえ、うろうろと書棚の隙間を歩きながら、本にも色々あるのだと、とても平凡なことを思った。古い学術書や歴史書、文豪の書いた物語ばかりが本ではないのだ。

それぞれのジャンルの本は、これまで知っている誰かを彷彿とさせた。もつと正確に言うならば、本は多くありすぎて、誰かを彷彿とさせるような本しか目にとまらなかった。園芸の本を見て父を思っ、料理の本を見て母を思っ、歴史小説を見ては岩波さんを思っ出した。図書館の歴史、という本が並ぶ棚で、上緒さんは足を止めた。

一冊取り出して、目次を見る。

『特別探索司書』という見出しを探して、ページをたぐった。該当の箇所には、司書の変遷とその種類、そして特別探索司書を定義する条文と、その権限について書かれていた。あとは、国立図書館を例にとり、データ運用の方法だ。

その内容は想像していたよりもずっと理系で、びっくりした。ワルツさんもこんなデータを扱っているのだろうか、わからないなりに感心して、書棚に戻した。

すると前に行く女性が、カードを機械に差し込み、自動扉をあけて階段を降りていくのが見えた。分厚い眼鏡によれたジャージを着た、野暮^{やぼ}ったい妙齢の女性だった。慌てて上緒さんが自分のカードを財布から取り出し、前に行く女性にならって同じように機械に差

し込む。

ワルツさんから最初に説明を受けた。地下は書庫になっているという。入ってはみたいが、ひとりでは怖い。誰か知らない相手とでも、連れだつていけるのならばと思い切った。地下は古い図書がある、というワルツさんの説明を上緒さんは覚えていた。地上にある以上の図書があるのかなと上緒さんは不思議な気持ちになった。

黒い滑り止めのついた急な階段を降りていくと、ふわっと上緒さんの身体を外とは違う湿度が包んだ。館内全体の空調は管理が行き届いていたが、それ以上にこの地下は最適な温度と湿度が保た^{たも}れているようだった。人間の、ではない。本の、最適な温度と湿度だ。やわらかな湿度とともに、鼻の粘膜を刺激したのが、劣化をはじめた紙とインク、糊の匂いだった。

その段にいたって、これは本の匂いなのだ、ということに、上緒さんははじめて気づいたのだ。

（どうしよう、なんだか）

なつかしい、と思った。近しい場所には踏み込んだこともないのに、郷愁がこみあげる。そんな匂いだった。

階段を降りると、そこはひどく閉じた世界だった。地上を昼とするなら、地下は夜。自然光のない空間はより強い圧迫感があり、同時に静謐^{せいひつ}でもあった。

息をひそめているようだ、と上緒さんは思う。地上よりも低い天井、狭いスペースにしきつめられた本が音を吸収してしまふのだというからくりを、上緒さんは知らなかった。けれど、地上の本が生きているなら、この本はまるで、眠る本だと上緒さんは思った。先を行った女性はすでに木々のように生えた本棚の陰へと消えて、反響する小さな足音だけが上緒さんが孤独ではないのだと教えている。

上緒さんは一番近い棚を見た。木だ、と思う。多分、本物の木だ。木目の浮かんだ硬い素材はよく磨かれ、なめらかであたたかかった。その側面をなぞりながら、彫り込まれて漆を塗られた文字をたどり、口に出していた。

「義昭……文庫……？」

読み方には自信がなかった。出版社の名前だろうか。聞いたことがないな、と上緒さんは思う。もちろん上緒さんが知ってる純粋な出版社なんて、そう数はなかったけれど。

不思議だったのは、上の本棚よりもずっと、地下の本は雑然と置かれていたことだった。本の背表紙はきちんとあわせてあったが、所々入りきらないのか、横に置かれて隙間にいれられたり、手前に積まれている本もある。乱雑ではなく、むしろ自由を感じさせる置き方だった。

「わあ……」

試しに一冊、持ち上げてみて、そのカバーの色あせた様子や、焼けた紙色に驚いた。汚

いとも思えたし、アンティークでいぶし銀、という印象も同時に持った。

おじいちゃんのような本だ、と上緒さんは思う。

父母しか家族のいなかった上緒さんには、馴染みの薄い、おじいちゃん。馴染みは薄い
が、嫌いではない、そう思った。

博物館に収められて、ケース越しでしか見られないようなものが、手の届く範囲にある
ということが不思議だった。上緒さんは口を開けて本棚をたどった。雑多に置かれた書籍
達が、誰かを待っているような気がした。

その誰かは、もしかしたら自分かもしれない。そう思った時だった。

「ぎゃ、」

足元のなにかに躓いた。棚の上部に手を伸ばすための、踏み台だった。そう気づいた時
には遅く、上緒さんはバランスを崩して本棚に手をついた。そこには積み上げられた本が
あり、あつという間に大きな音を立てて数冊足元に落ちた。

「ぎゃー!!」

思わず声をあげて、上緒さんはしゃがみこむ。落ちた本は四冊。

「あ、あ、あ」

慌てて拾い上げながら、上緒さんは真っ青になった。ひととき古い一冊、そのハードカ
バーの表紙と中身が無惨にも離ればなれになっていた。

どうしようどうしようどうしよう！

頭の中は真っ白だった。

「おやおや」

悲鳴を聞きつけたのだろう。後ろから上緒さんをのぞいてそんなことを言ったのは、先に書庫へと降りていった、眼鏡の女性だった。長い黒髪をひとつにくくって、眠そうな細い目をよけいに細くして上緒さんを見た。

「あの、あの!!」

涙をためて言うと、女性は「ここにいなさい」と上緒さんに言った。そのはつきりとした言い方と、黒いふちの眼鏡とジャージも相^{あい}まって、学校の先生みたいだと上緒さんは思った。迷いなく書庫の奥へと歩いていったのだから、もしかしたら本当に先生だったのかもしれない。その婦人は「ワルツさんと呼んでくるから」そう言って歩き出す。一度数歩戻ると、本棚の間から顔を出して、言う。

「逃げちゃだめよ」

ぴんつと上緒さんの背筋が伸びる。

逃げない。逃げたり、しない。駐車場の事故の時だって、逃げなかったんだもの。

上緒さんは涙で揺れる視界の中で、脱皮するみたいに中身と表紙が外れてしまった本を見た。よくよく読んではいないけれど、宗教の本のようだった。ほつれた糸がわびしかっ

た。壊れてしまった、と思った。壊してしまった。なんて取り返しをつかないことをしてしまっただろう。ワルツさんはなんと言っていたっけ、弁償はないと言っていたんじゃないかったか。じゃあ、一体、どうするんだろう。

書庫に敷かれた赤い絨毯^{じゅうたん}に座り込んで途方^{とほう}に暮れていたら、ぱたぱたと軽快な足音。ひょいっと現れる、ワルツさんの顔を見たら、来るとわかっていたのに上緒さんの肩が怯えて揺れた。

「あの、あの、つまりいて、お、落として、しまつて」

壊れた本を持つ手がぶるぶると震える。ワルツさんが黙って手を差し出したので、そこへ本と、それからのはがれてしまった表紙を載せた。

「ごめんなさい……！」

涙はこぼれんばかりだった。ワルツさんが黙って本を見て、それから軽く表情がかげるのがわかった。わかってしまったから、やっぱり胸がしめつけられた。

「上緒さんって」

急に名前を呼ばれてびっくりした。昨日会って、登録をしたばかりなのに覚えてくれたのだと思った。自分には名札もないのに。昨日から迷惑をかけっぱなしだから、と思った。

ワルツさんは小首をかしげて、綺麗な形の眉を上げながら言った。

「もしかして、ちょっと、ドジですか？」

「ドジじゃないです！」

思わず叫んでいた。よく言われることだったから。けれどすぐにはっとして言う。

「でも、ごめんなさい……!!」

ドジじゃなくても、これは罵られても仕方ない、と思った。怯えきった顔でそう言おうと、ワルツさんはふっと笑った。

「はい」

頷いて、しゃがみこむと、ぽんぽんと上緒さんの肩を叩いて。

「大丈夫ですよ」

だからほら、立って。と促される。上緒さんは憔悴しょうすいしながらも、よろよろと立ちあがった。ワルツさんは怒ってはいないようだった。

「これくらいなら、わたしにも直せますし、もしも無理なら、お医者さんに来てもらうことにします」

「お医者さん……?」

上緒さんが問い返すと、にこつとワルツさんは笑って、誇らしげに言った。

「本のお医者さんです」

修理の人のことだろうか、おぼろげに上緒さんは思う。古文書にはその復元を専門に

する人がいるそうだから、本にもまたそんな「お医者さん」がいてもおかしくない。車を直す人がいるように。また、やり方さえわかれば岩波さんのように素人しろうとでも出来るのかも
しれない。

ワルツさんは、いつくしむようにまつげを伏せて、壊れた表紙をなでながら言う。

「ここにある本は古いものですから、こういうことも多いんです。もしも、壊れそうな本があつたら、教えて下さいね。修繕に回しておきますから」

上緒さんは、頷くことが精一杯だった。どうしてもいたたまれなくて、もう一度「ごめんなさい」と言った。「はい」とワルツさんは笑った。上緒さんのことを責めはしなかったけれど、あなたのせいではないとかばうこともなかった。頷く、それが、許す行為のようだった。

「上の方で、岩波さんが戻っていらっしゃってましたよ。車の修復、終わったのかもしれない」

本が決まったら昨日と同じところで読んでいるとおっしゃっていました。どうぞ、そちらへ。そうワルツさんは上緒さんに告げて、落ちた本をきちんとあつた場所に戻し、壊れものの本を抱きしめて、奥の方に行ってしまった。

奥に、利用客の使うものとは違う、事務室の方に続く階段があるようだった。

背筋がまつすぐの、ワルツさんの背中を見ながら、上緒さんは途方に暮れたようにひと

りぼっち、呼吸する古書の森の中で佇んでいた。

上緒さんのブルーの車は、綺麗に直った。

傷があったことなんて気づかないほどだった。それから、ぴかぴかの車体になった。お医者さんよりすごい、と上緒さんはとんちんかんなことを思った。

その段にいたって、上緒さんは岩波さんに、なんのお礼も用意していない、ということに気づいたのだ。お礼以前に、お詫^わびの品さえ用意していない。

「この！ お礼は改めて！」

「いいよ。ついでだから」

そのついでだって、上緒さんが巻き込んだものだった。なんらかのお礼とお詫^わびはせねばならない、と上緒さんは思う。でも、たとえばお金は、絶対に受け取ってくれないだろうという予感があった。改めてだ、と思う。連絡先をきくものはばかられたので。

「また、図書館にきますか？」

上緒さんが聞くと、岩波さんは頷いた。

「そりやそうだろう。借りた本は、返さにやららん」

まったくその通りだった。本当にそうだった。

「じゃあまたここで」

「はい、ここで」

そして上緒さんは再会を約束して、ぴかぴかのブルーの車に乗って帰った。どちらかといえはブルーな休日だったけれど、それでもぴかぴかのブルーだった。

新しい靴を履いた月曜日。おうし座のA型は、朝の運勢占いでも抜群にラッキーな一日を運命づけられた。そのはずだった。

ご機嫌に家を出た上緒さんは、仕事で大きなミスをした。ひどく初歩的な、データ保存のミスだった。上司とすれ違いがあり、連絡が遅れたのがあだになった。お昼休みいっぱいかかって復旧した時には、トラブル処理として手をつける順番を間違えているのだということに気づいた。

「一体なにしにきてるの？」

お局さまはいつもみたいいな金切り声を出さなかった。呆れかえった低い声で、立ちつくす上緒さんに苛立ちをぶつけた。

「いつまでも、おうちのお嬢さんじゃあ駄目なのよ」

やる気がないの？ それとも向いてないだけかしら。そう言われて、上緒さんの視界が

揺れた。午後いっぱい、少しでも頭を揺らせば涙がこぼれそうだった。その姿を、お局さまはうんざりした様子で見ている。

「帰っていいわよ」

終業近く、ひどく冷たい声で言った。

「今日はもういいわ。いてもらっても、空気が悪くなるだけだから」

その言葉に、上緒さんはなんと答えればよかったのだろう。大丈夫です。すみません。がんばります。でも、どの言葉も言えなかった。

頭を下げて、「お先に失礼します」タイムカードを握って、会社を出た。必死になって走って、ぴかぴかの、青い車に飛び込んだ。

「痛い」

思わず口をついて出た。足元を確認した。新しいパンプスが、上緒さんのかかとをえぐっていた。皮がむけて、赤い肌が見えた。

合わなかったんだ、と思った。

なにかが、全部、合わなかったんだ。

「痛いよう」

それから上緒さんは駐車場で突つぶして、車のドアを閉め切ってわんわんと泣いた。

酸素の少なさを感じて、顔をあげた時には、陽はずいぶんかげっていた。占いなんてもう信じないと思いながら、泣きはらした目で図書館の方にハンドルを切った。

サエズリ図書館はいつもよりずっと暗かった。

もう、そんな遅い時間だった。ぼんやりとそう思って気づいた。

月曜日だ。休館日、じゃないか。

ついてない日は、どこまでいったってついてない。上緒さんは路上に車をとめて、足を引きずりながらひたひたと、暗いサエズリ図書館に近づいていった。

加工ガラスの壁に手をあてると、奥の方で、少しの光が見えた。事務室は休館日も、やっているのかもしれない。ワルツさんは今日も、いるのかもしれない。

遠いところにある蛍光灯の明かりは、ひどく郷愁を刺激した。

上緒さんが家を出て働くと言った時、父も母も反対をした。

抜けたところのある、少々頼りないひとり娘だったからかもしれない。反対を押し切つて家を出たけれど、ことあるごとに、帰ってこいと父も母も言う。

帰ってこい。おまえひとりを養う^{やしな}くらい稼ぎはある。たった三人の家族じゃないか。

その通りだと思った。大切にしたいし、嫌いなわけじゃない。でも、そればかりを守つてどうするんだろう。まるで未来がないような言い方だと上緒さんは思っていた。

ひとりで生きていきたいわけじゃない。

でも、ひとりだって、生きていけるようになりたい。そういう未来だって、あるんだと思いたい。

私達は悲しい時代に、寄り添いあって生まれたのかもしれないけれど。それを忘れて、誤魔化しながら生きているのかもしれないけれど。

なんにも出来なくても。どんなに鈍くさくても。

未来に夢だって、見たいじゃないか。

ガラスにうつる、上緒さんの充血した目から、涙がひとつぶ、こぼれて落ちた。

「上緒さん」

その時だった。突然名前を呼ばれて、上緒さんは慌てて首を回した。

裏の方から顔を出して、立っていたのはワルツさんだった。

休みの日なのにきっちりいつものベストをきて、髪もまとめていた。なににも変わらない顔で微笑んで。

「どうしましたか」

やわらかな声で、上緒さんに聞いた。上緒さんは慌てて闇に隠れるように目元をぬぐって。

「な、なんでもないです」

ひよこひよこと、無様な様子で逃げようとした。

ワルツさんは泣きはらした上緒さんの顔ではなく、その、中途半端に脱いだパンプスに目をとめて。

「どうぞ」

なんでもないことのように招き入れながら、上緒さんに言った。

「サンダル、また、お貸ししますよ」

その声がやっぱり、あんまり優しかったから。

ぐすん、と上緒さんは鼻を鳴らして、頷いた。

サンダルに履き替えて、サエズリ図書館の裏口から通されたのは、地下の一室だった。利用者カードを必要としない、事務室の階段から下りると、関係者以外立ち入り禁止と書かれた重い扉。その奥に、小さな部屋があった。

ワルツさんが自分のカードを読み込ませて扉を開くと、本のそれにまじって、不思議なおいが鼻先をかすめた。薬草のような、苦く甘いにおいだ。

部屋は小さかった。上緒さんの住む部屋ほどもないだろう。壁はすべて木製の本棚で、書庫に近く、それよりももっと雑多に本が並べられていた。ラベルのついた、一目で古い

とわかる本ばかりだった。本と本の間にはところどころ隙間もあるし、かと思えば奥が見えないほど積み上がっているものもある。数段の梯子はしごになった台も備え付けられている。

本棚以外には、ランプを模した灯りの載った机があるだけだった。

全自動のエスプレッソマシンのスイッチをいれながら、ワルツさんが言う。

「ごめんなさいね。ちらかっていて」

「ここは……？」

それは整然とした図書室の様子とは違う、不思議なぬくもりだった。ワルツさんが振り返って笑う。

「作業室、というふうに、わたしやサトミさんは呼んでいますけど」

ペンや定規をはじめとした文具に囲まれて、置いてあった本に見覚えがあった。土曜日に上緒さんが書庫で壊した本だった。

外れてしまった表紙は、ぴったりとくっついている。

「これ、直ったんですか？」

「ええ、どうぞ、ご覧になって下さい。まだ糊がかわききっていないかもしれませんが、気を付けて」

おそろおそろその本をのぞいて、外れないことを確かめると、上緒さんは、隣にあった一風変わった古道具に目を留めた。

「煙管」
キセル

思わず口に出していた。置かれていたのは、年代を感じさせる煙管の一式だった。持ち運びが出来る取っ手がついた煙草盆たばこぼんには、灰皿と刻み煙草が詰められている。上に載るのは細い煙管だった。木で出来た持ち手と、真鍮しんちゆうで出来た、火皿と吸い口。すぐそばに古ぼけたマツチもあった。

「これ、吸えるんですか？」

時代劇のような道具に、思わず聞くと、「はい、吸えますよ」と軽い答え。驚いて、振り返る。

「ワルツさんが？」

こんな時代遅れなものを、と心の中だけで上緒さんは思った。長年続いた嫌煙けんえんの風潮は、ほとんどの愛煙家を駆逐くちくしてしまった。上緒さんの職場でも、男性であつても喫煙者はいない。それをこんな骨董品みたいな煙管でなんて。

ワルツさんは少し困り顔で笑うと、「少しだけ」と小さな声で言った。

「本来であれば、図書館に火気は厳禁なのですけれどね」

部屋に入る時にかすかにかおつたのはこの葉が燃えるにおいだったのだろうか。想像がつかない、と上緒さんは思う。けれどこの部屋は書庫とは別に空調が入っているようだった。そういう人がいることを、見越してつくられた部屋なのかも知れないと思った。

今はそのにおいよりも強く、疑似ぎじカフェインのやわらかなにおいがしていた。

ポポポポ、と愉快ゆかいな音がして、エスプレッソマシーンが泡立あわだったカプチーノを吐き出したようだ。

机の上にマグカップを置きながら、ぽつりとワルツさんが呟く。

「アレクサンドリアを忘れるな」

「え？」

上緒さんが聞き返す。ワルツさんは眉を上げ、自分の言葉を誤魔化すように笑みを浮かべると、椅子に座るように促した。

「いいえ。なんでもありません。よければ、どうぞ」

「ありがとうございます」と礼を言っ、上緒さんは小さめのマグカップに口をつける。すでに砂糖とミルクはまぜあわせてあった。控えめな甘さが、喉のどの奥からしみこんで、ずいぶん喉が潤いていたのだということに、今更気づく。

「すみません、休館日なのに」

「いいえ。ちょっと外の空気を吸いたくて、外に出たところでしたから」

ワルツさんも椅子に腰をかけ、マグカップを傾けながらそう答えた。

「お仕事ですか？」

休館日なのに。そう尋ねると、ワルツさんは笑う。

「はい。のんびりと」

それから、小さく首を傾げて上緒さんに尋ねた。

「上緒さんも、お仕事ですか？」

問われて上緒さんは「はい」と頷き、そのまま俯いてしまった。波の震えるマグカップの表面を見ながら、ぽつぽつと、自分はなんだか駄目なんだ、という話をした。

なにをやっても、一事が万事。全部駄目に思えてしまう。

一度そう思い始めたら、世の中のことも、他人のことも、みんな嫌になっってしまう。

ひどく詮^{せん}のないことだった。ましてや会ったばかりの図書館の司書さんに、迷惑なことこの上ないだろう。

けれどワルツさんは嫌な顔ひとつせず聞いてくれた。すっかり上緒さんの弱音を聞き終えてから、慰^{なぐさ}めることもなく否定することもなく、

「読書がいいですよ」

と静かに言った。マグカップから顔を上げる、上緒さんに。

「そんな日は、読書がいいです」

勇気づけるように、笑って。

「嬉しい日の読書は楽しいし、悲しい日の読書も、格別だから、大丈夫」

大丈夫ですよ。それだけを言ってくれた。

その日上緒さんは家に帰って、夕食をつまむのも早々に、ソファで本を開いた。数ページ読んで眠ってしまったてから、すっかり放置していたサエズリ図書館の本だ。

綺麗に手を洗って、ちゃんと座って。先にトイレも行っておいて。

もう一度最初から読み直したら、不思議なほどに、身体に染みた。眼球を通して、頭の裏側をなぞって、喉の奥、それから指先に活字が染みていく。少し厚みのある紙をめくる、その時に鼻から息を吸う。

肺まで届く。これは、物語の中の空気だと思った。

理解出来ないものは、無理にそうする必要はないのだ。言葉と言葉を追いかけて、不意に現れる光景と感情を、こくこくと呑み込んでいけば、それでいい。

主人公は小さな女の子。その子がゆっくりとひとりぼっちになっていく描写が、自分に重なった。

可哀想。可哀想なのは誰？

この子かな。つくりものの、誰かなのかな。それとも、私かな。

赤く腫れた目の涙腺はどこまでもゆるんでいて、ぽろぽろと無様な涙が落ちた。けれどそれはいやな涙ではなかった。少女が大切なものを失うたび、そして失ったものを、少女

が取り戻すたび、あたたかさに胸がつまった。

遠くまで飛べる、とワルツさんが言った。その言葉を、噛みしめる。

厚さが増す右手の中と、どんどん失われていく左手の重量。

そして物語には終わりがやってくる。「オワリ」をかたどる小さなイラストのあとには、作者の短いあとがきがついていた。最後の句点まできちんと読んで、分厚い裏表紙を、仕上げのようにぱたんと置いた。

「ぶあー……」

ソファに背中を預ける。ずっと前のめりになって読んでいたのだということに、そこでようやく気づいた。軽い頭痛がする。一日中数字の打ち込みをした疲労に似ていたけれど、同じものではないと思った。

時計は深夜の十二時をまわっていた。

「ドラマ、見逃しちゃった、な……」

こんなことより、やることがあったはずなんだけど。ぱらぱらと読み終わった本をめくったら、冒頭の方に開き癖くせがついていた。

なにげなくそのページを見ていて、もしかしたら自分のせいかも、と思うに至る。

このページは最初、開いたまま眠ってしまった時のもの。あの時開き癖がついたのだろうと思って、「ごめんね」と小さく声をかけた。

読むことで、^ま摩耗する。それが不思議だった。電子の形をした雑誌には、決してないこと。

そのまま顔を洗って歯を磨いて。泥のように上緒さんは眠った。

自分はひとりきりだ。ひとりきりだけど、本の中、もじやもじや頭の小さな女の子も、ひとりきりで自分の暮らす町を救ったじゃないか。自分はあるな、神様みたいがいい子じゃないけれど。ドジだけど。なんにも、出来ないけど。あの子だって頑張^{がんば}ったんだから。明日から、また頑張ろう。そう思った。

「ワルツさん」

週末の金曜日。今度はちゃんと慎重^{しんちょう}に車を停めて、上緒さんはサエズリ図書館の中、ワルツさんを訪ねて声をかけた。

「上緒さん」

「先日も、ありがとうございました」

深々と頭を下げて、最初に差し出したのは二回借りたサンダルと、野菜の袋だった。

「これは？」

「両親が突然持ってきたんです。実家の庭で菜園をやっていて……。でも、ひとりじゃこ

んなに食べられないから。おすそわけです」

火曜日の朝、両親に電話をかけたならその日のうちに靴と野菜を持ってきた。宅配便でもなんでもなく、自分で車を走らせて。心配性で過保護なお節介せつかい、と早々に追い返したけれど、追い出してからなんだか笑ってしまった。

「迷惑かもしれませんが、よければもらってください」

母親のベージュの靴はお古でくたびれていやだなと思ったけれど、少し古い素材がうまく足になじんだ。子供みたいにかかるとに絆創膏ばんそうこうを貼って職場に行く必要もなくなった。

「そんな、迷惑だなんて」

ワルツさんはまつげをおろして軽く頭を下げた。

「ありがたく、いただきます」

「いえいえ、本当に、うちの親が限度を知らなくて」

「心配なんですよ」

間髪かんはつをいれず、ワルツさんが言った。上緒さんの返事を待たずに。

「上緒さんが心配なんです。娘を心配しない親なんて、いませんから」

そう言うから、上緒さんは自然と、首を落とすように頷いた。

ワルツさんは安心したように笑って、それから上緒さんをのぞきこむように見た。少し

だけ不安そうな、心配そうな顔で。

「……本、読めましたか？」

上緒さんは顔をあげ、今度こそ、しっかりと頷いた。

「今、カウンターに返却して来ました。とっても面白かったです」
ぱっとワルツさんの顔に花が咲く。

「嬉しい」

借りた本が面白かった、ただそれだけなのに。上緒さんの手柄でもワルツさんの手柄でもないのに、こんなに喜ばれるなんて、気恥ずかしい気持ちになった。けれど嘘でもお世辞でもなかったから、上緒さんは重ねて言う。

「また、おすすめの本を教えてもらっても、いいですか？」

「もちろん！ 同じ作者の、よい短編集があるんです。今度は少し、大人向けの。書庫の本で少々古いんですが、文庫本で持ち運びも出来るし、是非読んで欲しいんです」

今、書誌データを出しますね、と張り切るワルツさんに、上緒さんが尋ねる。

「あ、ワルツさん、岩波さんって今日も来てらっしゃいますか？」

「いつも通りでしたら、いらっしゃってますよ。お探ししますか？」

「いいえ、大丈夫です」

自分で探してみますから！ と元気よく答え、ワルツさんから書誌のデータを受け取ると、書庫に降りて、渡されたラベル番号と、本を何度も見合わせ探し当てた。時間は、少々

かかった。薄い文庫本だと聞いていなかったら、見逃していたかもしれない。けれど、見つけた時に、この本は自分を待っていた本だと思った。

この森の中で眠り姫みたいに、自分を待っていてくれた本だ、と。

ハードカバーではない、薄く軽いそれを丁寧に取り上げて、軽快に階段を上る。

一階の書棚を通して、二階のソファへ。そこに、相変わらず、ツナギを着た岩波さんが座っていた。

「こんばんは」

「はい、こんばんは」

岩波さんは本から少し顔をあげ、軽く会釈する。上緒さんは野菜の入ったナイロン袋を差し出しながら、長い話になって読書の邪魔をしないように、早口で言った。

「あの、これ、ありがとうございます」

「ん？」

中身をのぞいて、岩波さんは少し困ったような顔をする。

「礼なんざいらんのに。退屈しのぎの素人仕事だよ」

「いいえ。でも、お詫びと、お礼です」

まだ貸し出しをしていない、小さな文庫本を胸に抱いて、上緒さんは言う。

「岩波さんがああして、私の車を直すと言ってくれなかったら、多分私、このまま一生、

本を読まないで生きていったと思うから」

岩波さんは上緒さんの言葉に即座に答えず、胸元の文庫本をさして、「……それは？」と尋ねた。

上緒さんは笑う。表紙を見せながら。

「今日借りる、本です」

前に借りた本は、読み終わったから。そう言ったら岩波さんは、その皺の浮かぶ目元を細めた。

「……面白かったかい？」

「はい！」

自信を持って、上緒さんは頷いた。

「……………」

その言葉に、岩波さんはゆっくりと息を吐いて、膝にのせた本を閉じた。

「あんたみたいな若い娘さんも、本が好きだというとはね」

しみじみと、味わうような呟きだった。

「……うちの、娘は、一冊も本を読まずに、死んでいったというのにな」

それは、突然の告白だった。上緒さんは心臓をわしづかみにされたような痛みに見舞われた。あまりのことに、息が詰まるかと思った。

娘を亡くした、と岩波さんは言った。この、浅黒く陽に焼けた、かくしやく嬰鑠として思慮深い、

それでいて手先の器用なおじいさんから、そんな悲しい言葉を聞くとは思わなかった。なぜ、とは、上緒さんは聞けなかった。聞いた方がいいのかもしれないと思っただけけれど、詳細を聞いた、その後、かける言葉が自分の中にあると思えなかったのだ。

行き過ぎた執心は病だ、という岩波さんの言葉を上緒さんは思いだす。

この世に病はたくさんある。病に至る悲しみも、この世界には、本当にたくさんある。慎重に、何度か深呼吸をして、上緒さんはつとめてやわらかく明るい声で言った。

「私、おじいちゃん、ずっと、ずっと前に亡くしました」

私が生まれてくる前に。そう呟くと、「そうか」と岩波さんは、細めた目元をいつそう細くした。そして、誰に言うでもなく、呟くのだ。

「生きてるもんは、せめて、立派に、生きていかなきゃならんなあ」

そうですね。そう、上緒さんが言って、優しく笑った。その時だった。

「どういふことだ!!」

図書館に似つかわしくない怒号が階下から響いてきて、慌てて上緒さんは、吹き抜けの手すりに掴まり、一階のホールを見下ろした。中央の貸し出しカウンターの前で、白衣のような服を着て杖をついた老人が、サトミさんに向けて怒鳴りちらしているのがわかった。上緒さんは岩波さんと目を合わせ、ぱたぱたと階段をおりていく。野次馬やじうまは決していい趣

味ではないと思ったけれど。

会話が聞こえる距離まで近づき、足を止めた。

「図書館では、お静かに願います」

「責任者を出せ、と言ってるんだ、地下の書庫のリストもな！」

「利用者登録をお済ませ下さい。利用者カードを差し込めば、書庫に入室していただけます。端末での検索は自由です。貸し出し冊数は五冊まで。貸し出し期間は二週間です」

完全に事務仕事に徹する口調でサトミさんが淡々と告げる。

「それが前時代的だというのがわからんのか!!」

老人が怒鳴る調子を強める。その目元には、特殊な補助スコープがはめこまれていた。先進時代のものらしきそれは、すっぽりと双眼を覆う埋め込み式であったため、彼の視線がどこを向いているのかはわからないが、顔に刻まれた皺や歯の色が、老いの深さを物語っていた。

どんな場所でもわけのわからないクレーマーがいるということを、社会に出て二年目の上緒さんはよく知っている。そしてその中でも、この客は冷静に相手をするのが辛いタイプだということが容易に想像出来た。

サトミさんは眉ひとつ動かさないというプロフェッショナルぶりを見せて。

「責任者は只今参ります。お待ちのお客様、こちらへ」

老人の斜め後ろにいた自分が呼ばれたのだと、気づいて上緒さんはハツとした。慌てて前に出る。それが、少しでもサトミさんの助け船になればいい。そう思ったのだ。

「あの、これ、貸し出し……」

手に持った古い文庫本をカウンターに置こうとして、顔を真っ赤にした老人に本をひつたくられた。

「あ、ちよつと!!」

なにをするの、と声を荒らげようとした時だった。それより大きな声に、かき消された。

「お前、これがなにかわかつているのか!!」

老人は穴があきそうなほど文庫本に目を近づけ、その文字をスキヤニングする動作をした。身分証を読み取ったものと、同じシステム。そして、噛みつくように上緒さんへ言う。「この本の価値をどれだけ知っている。戦前の廉価大衆本、しかも初版だぞ、原版はすでにこの国から消えた、実物でも完本はほぼ見つからない! それを、お前みたいな子供が軽々しく扱ってもいいと思っっているのか!!」

今にも血管を切りそうな剣幕に上緒さんはたじろぎながらも、同じように頭に血をのぼらせそうになった。もう少し上緒さんが俊敏だったら、なにか反論を口にしていたかもしれない。けれどその時、外から慌てて入って来たのは、普段図書館の駐車場に立っている警備員だった。

「お客さん、落ち着いて。向こうで……」

とにかく向こうで話しましょう。そう促す警備員を、老人は杖を振り上げて振り切る。

「私に触るな!!」

高齢の警備員はバランスを崩して尻をつく。顔を歪めたので、上緒さんはひやりとした。先に立ち上がっていたのはサトミさんの方だった。座り込んで警備員をいたわりながら、ひどく冷たい口調で、

「警察を呼びます」

そう呟く。返ったのは嘲るような笑いだった。

「かまわんぞ、あんな奴らになにが出来る！ 私の顔と名を見て、手などだせるわけがない！ こんな狂った施設、今すぐ閉鎖させる必要がある!!」

狂っているのはどちらの方だと、上緒さんが頭に血をのぼらせたまま口を開きかけた、その時だった。

「図書館では、お静かに願います」

パンプスのかかとを軽く鳴らして、地下から現れたのはワルツさんだった。サトミさんよりもっとずっと、落ち着いた声だった。館内に張り詰めていた緊張が少しだけゆるみ、その分老人のささくれた苛立ちだけが募ったのが、そばにいた上緒さんにはわかった。

真っ直ぐに歩いて来たワルツさんは、老人に手をさしのべて。

「失礼ですが、お客さま。その本はわたしがそちらのお客さまに資料案内したものです。貸し出しを希望される場合、予約の申し込みをしていただくことになります。身分証をご呈示いただけますか？」

淡々とそう告げた。

「なんだ、こいつは」

老人は、カウンターのサトミさんよりもずっと若いワルツさんのことを、不可解なものを見るように睨んだ。

「責任者を出せ、とおっしゃったでしょう？」

わたしがサエズリ図書館の代表です。

淡々と起伏のない声で、それだけをワルツさんは告げた。

「代表、だ？ お前のような……」

続いたであろう罵倒の言葉を遮るように、ワルツさんが言葉をすべりこませる。

「身分証をご呈示下さい。聴覚補助のためのデータ通信機が必要ですか？」

老人の灰味がかった肌が色を深くした。お前の耳は聞こえないのか。そう尋ねているものと同じだった。実際、視覚には補助のスクープを当てているのだから、強烈な嫌味になったようだった。骨の浮いた手が、カウンターを叩く。

「貴様のような、ものの価値のわからん人間が責任者だから、このような文化の冒瀆と虐

殺がまかり通るのだ……！　なにが代表だ、責任者だと!?　貴様のような小娘が、戦前の、

純然たる『紙の本』の価値を、どれほど知っている！」

つばを飛ばさんばかりの老人の言葉にくらべて、ワルツさんは静かに言う。

「リストの閲覧を、ご希望でしたね」

サトミさん、書庫のデータを。その言葉を予測していたように、サトミさんがすみやかに手元の端末画面を、机と平行にした。

立体ディスプレイにうつしだされるのは膨大な量の書誌リストだった。老人がスクープのつまみに触り、ディスプレイと同期させれば、息をのんだのが気配だけで上緒さんにはわかった。

ワルツさんはかつて利用者案内を行った時のようになめらかな口調で、老人に告げる。

「書庫に配架された戦前の書籍はおよそ十二万五千冊。その中でも廉価大衆本は半数以上に及び、完本の電子データが共有ネットワークに存在せず当館のものだけでも四万冊。また、状態の悪さなどから閲覧のみとなっているものに関しては一萬二千冊。その中には、ヨーロッパで一五〇一年以前に活版印刷された初期印刷本も数冊有しています。これらはすべて、すでに値段のつけられるものではありません」

ですから、わたしにはこの図書の価値を、測ることは出来ない。淡々と述べた後、ワルツさんは真っ直ぐに老人を見た。

「それが、この図書館です」

ワルツさんが言い終えても、背後の立体ディスプレイにはまだ、データが流れ続けていた。高速で浮かんでは消える、泡のようなそれらの文字が、ものの価値もわからないとされる上緒さんをも圧倒した。

老人の、歯ぎしりをする音が聞こえるようだ。

「——ふざけるな!! たとえ電子データを保存していたとしても、やすやすと人の手に貸せるものではない、すでに大部分が失われた、貴重な文化財だぞ!! それを知っていながら、なにを思っててこんなもの……!」

老人は怒るよりも嘆なげくように、ワルツさんに詰め寄った。

「この百年、たった百年だ! どれだけの本が焼かれ、どれだけの本が消えた!? そしてどれほどの人間が、こうした本を求め、手に入れられぬまま——……」

まくしたてられる言葉にも、ワルツさんはひるまなかった。

「借りたい人がいるからです」

真っ直ぐにその、黒い補助スコープのついた目を見て、言った。

「読みたい人が、いるからです」

「……貴様のような小娘に、なにが——!!」

また、その震える拳を振り上げようとする。ひやりと嫌な予感がして、上緒さんは声を

上げた。

「ワルツさん!!」

サトミさんはすでに、警備員さんを連れてその場からいなくなっていた。ワルツさんを
守る人は、誰もいない。

しかしその声に、先に反応したのは老人の方だ。

「……ワルツ？」

低く、絞り出すような声で、信じられないとも言うように、静かに言った。

「ワルツ、だと」

補助スコープのついた目は動かすことがかなわず、壊れた人形のように首を振りながら、
老人は言う。

「ワルツが、どこに」

その声は震えていた。杖を握る手もまた。おびえるように、惑うように。

なにかを悟り、^{さと}「やっぱり」と^{ささや}囁くような声で、ワルツさんは言う。

「父を、ご存じなのですね」

そこでようやく、老人はワルツさんの胸元、そのネームプレートに、顔を近づける。ゆ
っくりと、スコープの焦点を合わせる、沈黙の時間が流れ。

「馬鹿な」

かすれた呟き。それから。

「ギシヨウに娘などいなかった!!」

突然、激昂したように叫んだ。その激情のまま、噛みつくように言う。

「貴様どこの馬の骨だ! ギシヨウの財を、あいつのコレクションを、かすめとって食いつぶす気か!」

「ワルツさん」

その時低く、大きな声が響いた。上緒さんが振り返れば、立っていたのは、岩波さんだった。

「そいつを叩き出さないか。わしはもう、我慢がならんぞ」

岩波さんは、肩をいからせ何度も自分をなだめるように深呼吸をしながら、恨みのにじむような深い声で言った。

「ここは、あんたの図書館だ。それくらい、しても構わんのではないかね」

「岩波さん……」

ワルツさんが、そこでほんのわずかに戸惑う表情を見せた。

「ふざけるな」

老人はわなわなと身体を震わせながら吐き捨てた。

「全力で潰してやる。どんな手を使ってでも、私の残った、すべての財で、この図書館を

買い取るぞ!!　いいか、こんな冒瀆は許さない。ギショウの形見は、詩の一篇たりとて誰にも渡さぬ!　ここにある図書はすべて、しかるべき場所で、施設で、厳格な管理をされなければならぬものだ!!」

狂気じみたその言い方にも、ワルツさんは動じることがなかった。

「いくら積まれたとしても、図書館はお譲り出来ません」

それだけの、返答。会話をするつもりもないようだった。

ワルツさんは優雅ささえ感じさせる仕草で腕を伸ばす。

「お帰りはそちらから」

扉を手の平で示しながら、薄くまぶたを下ろして。

「その前に、お持ちの本を、お置き下さい」

老人はまだ、上緒さんから奪った文庫本を手に持ったままだった。せせら笑うように、肩を震わせ、言う。

「いやだと、言ったら?」

「許しません」

ワルツさんの返答ははやく、どこまでも迷いがなかった。

静まりかえった図書館の中で、かすかなクラシックの音だけが彼女を包む。

歴然とした事実だけを白いあかりに晒すように、怒りも憤りも慢心もなく、ただ真っ直

ぐに老人を見て。

ワルツさんは、静かに告げた。

「わたしはこの図書館の特別探索司書。あなたがサエズリ図書館の本を持つ限り、地の果てであっても追いつけます」

その気迫と、迷いのない言葉に、老人はたじろいだようだった。けれど、強がるように頬をひくつかせて、「特別探索司書、だ？」とワルツさんをあざわらう。

「そんなもの、前時代の崩れかけた遺物だろう。こんな小さな図書館の脆弱なネットワーク、ウイルスで潰すまでもなく、ケーブルの一本切ってやれば作動はせんわ。もう、ネットワークが万能であった時代は終わったのだ」

それは確かだった。マザーサーバーはいつまでも復旧されず、地方サーバーの不調やアクティブウイルス、システムのバグ、もっと原始的な、電力の供給不足で、ネットワークは度々に落ちる。極端に技術者も減った今では、メンテナンスもままならない。一部が落ちれば、全体への影響も出る。

けれど次に笑うのは、ワルツさんの方だった。

「その程度で、割津義昭の記憶回路と、通信ネットワークを停止できるとお思いですか？」
彼女は再び宣言をする。誇りをもって。己の存在と役割を。

「わたしは割津唯。この図書館の、特別探索司書です」

それが一体、どのように老人に響いたのか。ワルツの名前を最初に聞いた時と同じように、どこか途方に暮れたように立ち尽くして。

「……まさか」

かすかな声で、老人は囁いた。

「お前が、ギシヨウの」

それ以上は言葉にならなかった。ワルツさんはゆつくりと、老人に歩み寄り、静かな動作で、手をさしのべる。

「本を、返して頂けますか？」

ワルツさんの発した、どの言葉が、果たしてどんな作用をもたらしたのか。上緒さんにはわからなかった。けれども、老人からは、それまでの激情の火がおさまっているように見えた。ゆつくりと震える動作で、本をワルツさんの手の中に返して。

「本当に、ギシヨウの、娘なのか」

老人の言葉は、きつうだん糾弾でもなく、疑惑でもなく、まるで懇願のように図書館に響いた。そんなはずがない、という意味でさえないと上緒さんは思った。

「本当にあいつは、生きている間に、家族を、手に入れられたというのか」

そうであつたら、どんなにいいかと、すぎるようだった。

対するワルツさんは、そつと綺麗なまつげを伏せて。

「アレクサンドリアを忘れるな」

いつか、上緒さんが聞いた言葉を、もう一度、告げた。

老人が息を呑むのが、上緒さんにもわかった。ほんのわずかに泣きそうな顔で、ワルツさんは淡く、笑う。

「パパの、口癖でした」

なくしたものを惜しむように、ずっと大切にしていたものを明かすように、ワルツさんがそう言えば、老人は、不自由な動作で、自分の目元に指を押し当てた。そうしてこぼす、言葉は。

「……薄情者が」

その場にいた、誰に対するものでもないように、上緒さんには思えたのだ。そこにいた誰でもない相手をなじる言葉は、空中に溶けて、消える。

なだめるように、いたわるように、ワルツさんが覗き込んだ。

「お客さまが、父と、父のコレクションを、大切に思っ下さっていることは、よくわかります。……でも」

でも、ごめんなさい。

ワルツさんは小さな子供に言っけさせるように、静かな声で言った。

「パパの本は、全部、わたしがもらいました」

顔をあげる、老人は。打って変わって弱々しく、ワルツさんに、両手を伸ばし、すぎるように、言う。

「わかつているのか。……このままでは、この世界は」

震えている。その震えが、なんなのか。上緒さんにはわからない。けれど確かな恐怖を、皺としみの浮かぶ表情にうつして、絞り出すように言った。

「本は、死ぬのだぞ」

それはまるで、助けを求めるような声だった。

ワルツさんは胸に本を抱いて、安心させるように、迷いなく告げた。

「本は死にません」

美しく、微笑んで。当然のことのように言うのだ。

「だって、みんな、本を愛していらっしゃるでしょう？」

人類の歴史上に書物が登場して数千年の時が過ぎた。紙という伴侶はんりょに行き着くまでに紆う余曲よきよくせつ折を経たが、長きに亘りわた、本はそれ自体ひとつの完成形として人間の傍らにあった。

それから、電子元年と呼ばれる区切りを何度も迎え、けれど本が消えることはなかった。

ひとつの極限である、本が消えることは決してなかったのだ。変わったのは、価値と意

味。それだけのこと。

上緒さんは、借りる文庫本を岩波さんに預けると、サエズリ図書館を飛び出す。ふらつく足取りで、濡れた猫のようにうなだれながら肩を落とし、サエズリ図書館を出て行く背中を追った。

図書館は閉館時間が迫っていた。本当はワルツさんが追いかけたかったに違いない。けれど、ワルツさんは他の客の応対をしなければならなかったから。

上緒さんは声を上げた。

「おじいさん！」

駐車場に置いてあった車には運転手がいるようだった。その扉が、触れるだけで開く。上緒さんの乗っているような自動車ではない。自家用車という言葉を使用しなかった先進時代の個人車プライベートカーだった。それ一台でも、家が十軒買えるほどの値段だ。乗り込む前に、ゆっくりと上緒さんを振り返った。

「あの、あの……っ」

自分の言おうとしていることが余計なことなのだろうという自覚は、上緒さんに十分にあった。だから、躊躇った。

けれど老人は、吐息のように小さな声で言うのだ。

「すまなかったね」

思わず上緒さんは目を見開いた。

「……失礼を、した」

頭を下げる。紳士的な仕草だった。本当に心の底から、詫びているようだった。その背がなんだか一回り以上、小さくなってしまったようだった。

上緒さんは唐突に胸が詰まって、早口で告げた。

「あの、おじいさん、サエズリ図書館は、カードさえあれば、誰だって借りられるんです。だから、いつでも来て下さい！」

ワルツさんならきつと、こう言ったであろうと思って。

けれど、老人は笑うだけだった。唇の端をほんの少しだけ吊り上げて、自嘲するように言葉をこぼす。

「ありがたい申し出だがね、お嬢さん。……私の目では、本は、もう、読めんだ」

上緒さんは驚いて、顔を上げた老人の、黒いスコープを見た。それから、先ほどの、文字を読み取るような仕草を思い出した。

彼のスコープは最新式のようだった。単純な視力矯正ではなく、映像をデータとしてスキャニングする。それは個人車と同じように、確かな富裕の証あかしでもある。けれど、「悔しいもんだよ」と老人は泣き笑いの表情でこぼすのだ。

宙を見る、老人の横顔に、浮かぶのは遠い憧れあこがだった。かつて多くの人が、今でもきつ

と、一握りの人が、憧れを抱いて、本を求めたに違いない。

「若い時に、あれほど夢見た読書だよ。十二分に金を稼いで、本を集めて、耽溺^{たんでき}するつもりだった。いつか互いの蔵書を自慢し合おうと、約束をした、友もいた」

上緒さんにとって、サエズリ図書館が、生まれてはじめて入る図書館だった。

しかし、図書館に入ったことがある同級生が、果たして何人いるだろうか。そこで本を借りたことがある人間が、上緒さんの友人の中にいるだろうか。

学校には図書室があった。

けれど、そこにおさめられた図書は、まるで標本のようにケースの中にいれられ、手袋をした教師が、うやうやしく扱うものだった。

本が安価で、万人のものであった時代は終わったのだ。

「データならばある」と老人は言った。

かつて、石板は本へと形を変えた。同じように本もまた、変化の道をたどっただけだと言う人がいる。

「自宅のネットワークならば、どんな電子書籍でもリーディングは出来る」

彼のスコープはやはり、読み込みの機能も有しているのだろう。脳に直接データをたたき込むことさえ可能であるはずだった。

車に乗り込みながら空に嘆くように深い深い息をついて、老人は言う。

「けれど……私は、本が好きだったんだよ」

上緒さんには、かける言葉がなかった。

はじめて本を読んだ上緒さんだ。最初は印字された文字が味気なく感じられて、退屈で眠ってしまったほどだ。本を好む人なんて、それこそ先生か、研究者か、よっぽどのお金持ち。好事家だと。

けれどそれを好きな人がいる。今でも、どれほどそれが手軽さを失っても、本を、読みたい人がいる。

行き過ぎた執着は、病だ。

彼はそうなのだと思う。よっぽどの、と言われるほど、病と言われるほど。本を、愛していたのだ。

「お嬢さん、本は好きかい？」

ぽつりと、助手席に座って、うなだれたままで老人は、上緒さんに聞いた。

上緒さんは迷う。ワルツさんのように、岩波さんのようにはいかなかった。自分の気持ち、どこまで老人の言葉に釣り合うのかは、わからない。

それでも、上緒さんは言った。

「わかりません。でも……面白かった、です」

「そうか」と老人の声が、ため息とともに吐き出される。そして、小さな頷きとともに。

「……そうだな。そういう人に読まれた方が、本も、幸せなのかもしれん」

個人車のドアが閉められ、シートベルトが全自動でかけられる。窓だけが開いて、老人はここまでついてきた上緒さんに、一言告げた。

「よい読書を。さすればギシヨウも……私の友も、喜ぶだろうよ」

最後の言葉を、もつと深く尋ねてみたかったけれど。

そのまま老人は、車を進めて、夕焼けの中へと消えていく。紅色に染まる緑樹の合間を縫って。もう、彼を追うすべはないのだと、佇みながら、上緒さんは見送った。

「アレクサンドリア、ってなんでしよう」

それからしばらく後、サエズリ図書館で岩波さんと再会した上緒さんは、館内のソファに座って、隣にいる岩波さんに尋ねた。

ワルツさんとはあれから図書館に来るたび会っていたが、先日の騒ぎの話題は出ることはなかった。なんと尋ねていいのかも、上緒さんにはわからない。

ひとりごとのような問いかけだったから、答えは返らないかと思っていたが、岩波さんは開いた本から顔をあげず、ぼそぼそと答えた。

「アレクサンドリア図書館のことじゃないかね」

首を傾げる上緒さんに、岩波さんは重ねるように説明をしてくれた。

「古い図書館だよ。紀元前の昔に、貴重な文書とともに焼け落ちたとされている」

無知である上緒さんはぴんとこなかったけれど、アレクサンドリアという名前の図書館があるのならば、それは間違いがないのではないかと思った。

その言葉に込められた意味までは、わからないけれど。

ここは図書館なのだ、と並ぶ本棚を眺めながら、噛みしめるように上緒さんは思う。

前時代の遺物だといった、老人の言葉はとても正しい。本来であれば、一介の個人が所有できる財ではなく、管理出来るような代物しろものでもない。たとえば上緒さんには、岩波さんの持つ全集の一冊が、どれほどの価値をもつのかさえ、わからない。

それでも、この建物は図書館として建てられ、図書館として、息を、している。

「……あの、岩波さん。ギショウ、って」

次の問いに対する答えは、もっと明確なものだった。

「この図書館の創設者のことだろう。割津義昭よしかさ。地下の書庫にある蔵書は、彼が個人的に集めたものとして、義昭文庫と名前がついている」

そこではじめて、上緒さんは心の中でギショウ、という文字に漢字を当てることが出来た。あの、地下の書棚。そこに彫られた、名前。ぬくもりを感じる、眠るように配架された、古書達。

「ワルツさんの……お父さんだったんですか」

「確かなことはわからんよ」

岩波さんはもう一度、そう前置きして。「高名な科学者であり脳外科医だったという記録はあるが」とぼつぼつと言った。

その記録には、生涯妻をもたなかったと記されていたとも。

「脳外科医……」

思うところがあつて、上緒さんは呟く。その、義昭という人と、ワルツさんの本当の關係については、わからない。わからないけれど、これほどの本を、ワルツさんは与えられて。ワルツさんは、これらの本のすべてを、自分の宝物だと言う。

「ワルツさんがいなければ、わしらはこんなにも本は読めなかった」

愛おしそうに広げた本をなぞりながら、岩波さんは言う。

「感謝せねばな」

そうですね。心の底から、上緒さんは同意する。それから、「今日借りる本を探してきます」そう言って、立ち上がる。

別れざま、「上緒さん」と岩波さんが呼び止めた。

振り返ると、岩波さんは顔を上げて。

「よい読書を」

そう言うから。

「はい」

上緒さんも笑って、同じように、言葉を返した。

「それでは、よい読書を」

さえずり町と呼ばれる街がある。

緑に溢れたのどかな街には、そこに似合いの美しい図書館があつて。

美しい図書館には、そこに似合いのとびきり素敵な司書さんがいる。

そうしてその、図書館には、今日も誰かが。

本を愛する、誰かがいるのだ。

あとがき

私達は長い間、治らぬ病にかかっています。

それは、「いつか本がなくなってしまうのではないか」と思い悩む病です。

不思議なことに、この病は本が好きな人しかかかりません。本を愛する人だけが、怯え、危惧し、未来を悲観し、惑います。本に馴染みのない人達は、ただの時代の流れとして、振り向くこともありませんでした。

私自身は、本の死をおそれたこともあつたけれど、「そんなはずはない」と思っていました。何度訪れる「電書元年」も、本を駆逐する事など出来ない、と。

けれど、二〇一一年の春、この国をおそった震災の中、もしかしたら、本はなくなるのかもしれない、と思いました。もちろんそんなことはなく、未来のことも、わからないけれど。混乱と不安の中で、今、この物語を書きたいと思いました。

おだやかで、やわらかな、サエズリ図書館のお話を。

そしてそこに生きる、本を愛する人の物語を。

私が図書館に勤務していたのは、しばらく前の事です。

毎日愉快に忙しく、本に囲まれ働きながら、「探している本がどこにあるのか、手に取るようにわかればいいのに」と思っていました。ワルツさんが出来る上がるきっかけはそんなささやかな願望でした。なかなか書く機会に恵まれず、あたため続けてきたのですが、星海社さんの「最前線」というWEBサイトを拝見した時に、この物語にふさわしいのかもしれないと思いました。

文芸の最前線たる、WEBサイトから。一冊の本を、お届けしたいと。

本が出来上がるまで、根気強く物語と向き合って下さった、星海社の山中さん、イラストを引き受けて下さった、simeさん。本当にありがとうございます。

サエズリ図書館と、ワルツさん。もったいないほど美しい本になりました。

物語は、何度でも、問いかけます。

電書ですか？ 本ですか？

彼女達は、何度でも、答えます。

やはり、本です。

これは、その理由を語り続ける、シリーズです。



星海社
FICTIONS

サエズリ図書館のワルツさん 1 PDF Edition

2012年8月16日発行

著 者 ————— こうぎょく 紅玉いづき
©Kougryoku Iduki 2012

イラストレーター ————— sime
フォントディレクション ——— こんの しんいち 紺野慎一

カバーデザイン ————— Veia

発行者 ————— すぎはらみきの すけ おおたかつし 杉原幹之助・太田克史
編集担当 ————— やまなか たけし 山中 武

発行所 ————— 株式会社星海社
〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル4F
TEL 03(6902)1730 FAX 03(6902)1731
<http://www.seikaisha.co.jp/>

本データの閲覧以外の目的での無断使用は、著作権上での例外を除き禁じられています。

続きは『サエズリ図書館のワルツさん 1』をご購入ください。